

令和8年度 学力向上アクションプラン

学校番号

220

江戸川区立瑞江第二中学校

「全国学力・学習状況調査」平均正答率東京都との差				「江戸川区学力調査」平均正答率全国との差						
学年	第3学年			学年	第1学年			第2学年		
年度	国語	数学	合計	年度	国語	数学	英語	国語	数学	GTEC
令和12年度の目標				令和12年度の目標						
令和11年度の目標				令和11年度の目標						
令和10年度の目標				令和10年度の目標						
令和9年度の目標				令和9年度の目標						
令和8年度の目標	+5	+5	+10	令和8年度の目標	0	+4.0	+2.0	+2.0	+3.0	実施予定なし
令和7年度の結果	+3	+5	+8	令和7年度の結果	-0.7	+4.2	+2.1	-0.4	+3.0	未実施
令和6年度の結果	0	0	0	令和6年度の結果	-0.5	0	+2.9	+5.6	+6.7	531.8
令和5年度の結果	+4	+1	+5	令和5年度の結果						

年度	令和7年度	令和8年度
内容	成果と課題	目標 目標達成に向けた取組
学校全体	<p>【成果】 全学年で数学を中心に全国平均を上回る成果が見られ、基礎的な知識・技能の定着が進んでいる。継続的な指導の成果が学校全体に表れている。</p> <p>【課題】 一方、国語を中心とした記述力・表現力に課題がある。数学でも説明問題に無解答が見られ、根拠を示して表現する力の向上が必要である。</p>	<p>数学は全学年で平均正答率を全国平均(第3学年は東京都平均)より+5ポイント以上とする。また、記述式問題の正答率を第3学年で40%以上、他学年も全国平均以上に引き上げる。さらに、全教科共通無解答率を10%未満に改善する。</p> <p>授業において「根拠を明確にして説明する活動」や記述問題を計画的に取り入れる。また、国語で培う読解力を基盤に、教科横断的に書く活動・説明する活動を充実させる。さらに、定期的な振り返りと補充指導を実施し、基礎基本の定着と無解答の減少を図る。</p>
第1学年	<p>【成果】 数学および英語において全国平均を上回る平均正答率を示しており、基礎的な知識・技能の定着が着実に進んでいる。特に数学は全国平均比+4.2ポイントと差が大きく、計算技能や基本的な問題への理解が安定していることがうかがえる。英語についても全国平均比+2.1ポイントと全国平均を上回っており、語彙や文構造の理解など、初期段階で身に付けるべき内容が一定程度定着している。これらの結果から、学習習慣の形成や授業での基礎的な指導が成果として表れていると考えられる。</p> <p>【課題】 一方、国語は平均正答率が全国平均を0.7ポイント下回っており、文章全体の内容を把握した上で設問に答える力や、条件を正確に読み取る力に課題が見られる。語句や文の意味は理解していても、複数の情報を関連付けて考える問題や記述式の設問に十分対応できていない傾向がうかがえる。また、国語の正答率が他教科と比べて低いことから、言語活動を基盤とした学習の充実を図り、全教科における読解力の向上につなげていく必要がある。</p>	<p>数学および英語において全国平均を上回る平均正答率を維持・向上させるとともに、国語の改善を重点目標とする。 具体的には、数学の平均正答率を全国比+4ポイント以上(55%程度)、英語は全国比+2ポイント以上(75%程度)を目標とし、基礎的な知識・技能の確実な定着を図る。一方、国語については全国平均を0.7ポイント下回っている現状を踏まえ、平均正答率を全国平均以上(66%以上)に引き上げることを目標とする。 これらの数値目標を達成することで、教科間の学力差を縮小し、学年全体の学力の底上げを目指す。</p> <p>数学および英語で全国平均を上回る平均正答率を維持・向上させるため、基礎的な知識・技能の定着を目的とした反復的な学習を継続する。特に数学では、計算問題から文章題、活用問題へと段階的に学習内容を発展させ、考え方を説明する活動を授業内に取り入れる。英語では、語彙や文法の定着を図るとともに、簡単なやり取りや表現活動を通して、学んだ内容を実際に使う機会を確保する。 一方、国語の平均正答率向上に向けては、文章の要点を整理する活動や、根拠を明確にして考えをまとめる記述活動を計画的に行う。また、全教科で共通して読解力を意識した指導を行い、言語活動の充実を図ることで、国語の学力向上を全体の学力向上につなげていく。</p>
第2学年	<p>【成果】 数学および英語において全国平均を明確に上回る平均正答率を示しており、学年全体として学習内容の定着が進んでいる。数学は全国比+3.0ポイントと安定した成果を示しており、既習事項を活用して考える力が一定程度身に付いていることが分かる。特に英語は全国比+8.9ポイントと大きく上回っており、基礎的な語彙や文法の理解に加え、応用的な設問にも対応できる力が育成されている。継続的な指導や学習の積み重ねが成果として表れている。</p> <p>【課題】 国語は全国平均を0.4ポイント下回っており、他教科と比較すると伸びが緩やかである。学年が上がるとともに求められる記述力や論理的に考えをまとめる力に対し、十分に対応できていない生徒が一定数見られる。文章の要点を整理したり、自分の考えを根拠とともに表現したりする活動を、授業の中でより計画的に位置付けていく必要がある。また、国語で身に付ける力を他教科の学習にも生かせるよう、教科横断的な取組を進めることが課題である。</p>	<p>数学および英語で全国平均を上回る平均正答率を維持・発展させるため、理解が不十分な内容を早期に把握し、補足的な指導を行う。数学では、既習事項を活用して考える場面を増やし、思考過程を言語化する活動を通して理解の定着を図る。英語では、聞く・話す・読む・書くの各技能を関連付けた学習活動を充実させ、実践的な言語運用能力の育成を目指す。 国語については、全国平均との差が小さい現状を踏まえ、文章構成を意識した記述活動や、考えを交流する学習を授業内に位置付ける。さらに、国語で身に付けた力を他教科の学習に生かす教科横断的な取組を進め、平均正答率の向上と学力の定着を図る。</p>
第3学年	<p>【成果】 数学は平均正答率58%で、全国平均48.3%を約9.7ポイント、東京都平均53%を5ポイント上回っており、学年全体として学習内容の定着が進んでいる。特に「データの活用」は72.1%と全国平均58.6%を大きく上回り、資料を基に考える力が身に付いている。国語も平均正答率60%で、全国平均54.3%を上回り、「読むこと」は68.4%と安定した成果が見られる。基礎理解に加え、内容を捉えて判断する力が一定程度育成されている。</p> <p>【課題】 一方で、両教科に共通して記述力に課題がある。数学の記述式は50.3%であるものの、証明や説明問題では無解答率が20%を超えるものが見られる。国語の記述式は32.9%と低く、自分の考えを根拠とともに文章で表現する力が十分とは言えない。今後は、要点を整理して説明する活動や記述を伴う学習を計画的に取り入れ、論理的な表現力を高める必要がある。</p>	<p>授業においては、正答を導き出すことだけを目的とせず、「どのように考えたのか」「なぜその結論に至ったのか」を言語化する学習活動を意図的かつ継続的に設定する。数学では、説明や証明問題に取り組み際に、必要な条件や論理の流れを整理する視点を示し、例示や段階的な支援を行いながら、最終的には自力で構成し、最後まで書き切る力を育てる。国語では、文章の要点を整理する活動や、根拠を明確にして自分の考えを書く記述活動を継続的に行うとともに、書いた文章を振り返り、改善点を基付けて推敲する学習を重視する。さらに、教科間で指導の視点を共有し、「理由を明確にして説明する」「根拠を基に判断する」といった学習活動を教科横断的に進めることで、思考力・表現力の定着と向上を学校全体で図っていく。</p>